

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

アイルランドの文学的伝統とジェイムズ・ジョイス (2)

著者	結城 英雄
出版者	法政大学文学部
雑誌名	法政大学文学部紀要
巻	71
ページ	47-56
発行年	2015-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/11611

アイルランドの文学的伝統と ジェームズ・ジョイス（２）

結 城 英 雄

潜伏期からの転換

1941年にジョイスが没した後も、アイルランドにおける彼の文学に対する反応にはほとんど変化はなかった。ジョイスが忌避されるべき作家であることに、いささかも変わりはないのである。数少ない文学者を除き、その作品を手にする人もいなかった。シェイン・レズリーの『ユリシーズ』をめぐる出版直後の評言そのままであった。彼曰く、「数多くの頁にカトリックの教義や引用があふれている。そのため、ダブリンの市民やカトリック教徒でない批評家にとり、本書の意味を読み解くことは難しい」（Leslie 201）。要するに、アイルランド人であれば、この書が無意味な知識の氾濫であることを簡単に見抜けるということらしい。ジョイスに対する受容はこんな感じであった。また性描写をめぐる、後年にチェリル・ハーが当時を顧みてこう述べている。「ジョイスの罪は、ボルノの作品に使用されるコードと、文学や行動の規範を支配しているコードを混同したことだ」（Herr 35）。

こうしたジョイスに対する姿勢を支えていたのが当時の政治体制であった。その中心人物がエイモン・デ・ヴァレラであった。彼は1932年から1948年まで、さらに1951年から1954年、そして1957年から1959年までと長らく首相の任にあり、その後も大統領としてアイルランドの政治に深く関わっていた。彼が布いた政策は、アイルランドの完全な独立であり、英国から被る影響力を無効にすることであった。そのためデ・ヴァレラは、奇妙なことに、W. B. イェイツたちアイルランド文学ルネサンスの文学者の唱えた田園国家を政策の目標として掲げ（Foster 253）、農業を中心とする国家を構築することにした。そのような閉塞的な国家体制において、モダニストとしてのジョイスを公然と受容できるはずもなかった。政治を支えていたのはローマ・カトリック教会であったことも想起しておきたい。

1944年に出版されたジョイス死後の『スティーヴン・ヒーロー』も、またサミュエル・ベケットの1954年と1956年にそれぞれ出版された『ワット』と『モロイ』も検閲処分を受けた。さらにジョン・マギヤハンも1965年に『闇』で論争を巻き起こし、検閲処分を受けた。マギヤハン「アイルランド人作家であるためには、ジョイスやベケットのように、亡命しなければならない」（Carlson 64）と述べていた。

このような事情からすれば、ジョイスの伝記作者リチャード・エルマンの言葉は意味深長である。彼は『ユリシーズ』の検閲処分を最後に撤回した国民はアイルランド人であった」（Ellmann 3）と指摘している。しかし実情は不明である。『ユリシーズ』を含め、ジョイスの作品が検閲処分を受けたかど

うかさえ明らかではない。たとえば、ダーモット・キョーは『ユリシーズ』が「アイルランドで検閲を受けたことはない」(Keogh 31)と語っている。その一方、ヴィヴィアン・マーシーは『ユリシーズ』が「税関と警察の検閲下」(Mercier 299)にあったという。ジョイスも「アイルランドが検閲を解除するのは千年後」(Joyce 358)であろうと語っていた。ジョイスの作品は国外で出版され、エリートの文学というブランドも刻印されており、販売を慎むようにとの地元の書店に対する勧告がせいぜいであった。それに加え高価であったため、検閲云々は論外であったかもしれない。

ひるがえって、1930年代から1960年代初頭まで、アイルランドは眠れる国として、経済活動の低迷、失業率の増加、慢性的な移民などに苛まれていた。アントニー・クローニン、このような閉塞的な状況をめぐり、以下のように要約している。「戦後のアイルランドは抑圧的で清教徒的な国土であり、ヨーロッパの旧式の自由主義でさえも、革新的で危険な思想と見做された。存在することのない共産主義者や、ほとんど目にするものがない自由主義思想家へ、司教からの定期的な批難が下されていた」(Cronin 157)。

にもかかわらず、ジョイスを支持する文学者も少なからず増えていった。それに加えジョイスの文学とかみ合うべき時代の変貌があった。1982年のジョイス受容は必然的な流れであった。以下、ジョイス受容にまつわる「変遷期」(1941～1982)について考察したい。

変遷期 (1941～1982)

アイルランドの変貌とジョイス受容

1998年に、北アイルランドの地位をめぐり、アイルランド共和国で国民投票が行われた。そして94%もの国民が分離を支持した。デ・ヴァレラが北アイルランドを含め、アイルランドはアイルランド島全土であると宣言して以来初めての逆転である。ジョイスの『ユリシーズ』第十二挿話の酒場で、民族主義が議論されていることを想えば、時代の変貌を意識せざるをえない。実のところ、こうした変貌は1960年代に開始されていたのである。

W. B. イェイツらによって唱えられ、デ・ヴァレラが鎖国政策の理念とした田園国家も、世界の工業化の流れに折り合いをつけざるをえなくなっていたのだ。1960年代においては、「娘たちは十字路で踊っていたのではなく、最新のカラーテレビでローリング・ストーンを聴いていた」(O'Connor 149)のである。かくしてB. J. グレアムはこう述べている。「アイデンティティの複数性は、ヨーロッパのアイデンティティとして通用するための、なおかつ地域紛争を解決するための前提条件である。新しいヨーロッパにおける新しいアイルランドの文化遺産は、アイルランドの同質性ではなく、その異質性を定義するため、イデオロギー的に構築されなければならない」(Graham 155)。

この「同質性」から「異質性」への転換は、当時のアイルランドにとり難題であった。当局の冷遇を受けていたプロテスタントの人々が多文化主義を唱えて、その手段としてジョイスの文学を称揚していたことを想起したい。彼らはカトリックという文化だけではなく、多様な文化の併存を力説したのであ

る。おそらく「同質性」から「異質性」への転換はその後のアイルランドにとってもやはり難題であり続けたのだろう。それは1990年代に登場したジョイスの10ポンド紙幣にも明らかである。表はゲール語であるのに対し、裏は『フィネガンズ・ウェイク』からの引用である。アイルランドはゲール語国家としての「同質性」で構成され、同時にEUの加盟国として他国の「異質性」も包含しているということらしい。アイルランドの矛盾した姿勢を映していると思われる。

デ・ヴァレラは、プロテスタントを中心とした文学ルネサンスの作家たちの田園賛美を踏襲しつつも、プロテスタント的な影響を否定していた⁽¹⁾。その一方、プロテスタントの作家たちはカトリックの狭量な政治体制に辟易しながらも、ジョイスののびやかな文学を讃美した。そうした矛盾を皮肉るかのように、ブレンダン・ケネリーは、「プロソリックス」(Protholics)と「カテスタンツ」(Cathestants)という造語を案出した(Kiberd 424)。このような事情もあり、ジョイスがアイルランドで受容される見込みは少なかった。それでも宗教のいかんに関わらず、ジョイスを敬愛する人もいた。そのスタートが1954年のブルームズデイの祝祭で、アントニー・クロニン、ジョン・ライアン、ブライアン・オノーラン(フラン・オブライエン)、パトリック・カヴァナといった作家たちがサンディマウントのマーテロ塔に集まったのだ。

ブルームズデイの祝祭に疑問がなかったわけではない。カヴァナは「誰がジェイムズ・ジョイスを殺したのか?」という詩を書き、「ハーバード大学の論文」と「エール大学の男」(Kavanagh 51-2)にその責任を帰している。前者がハリー・レヴィンの研究の意で、後者はリチャード・エルマンとヒュー・ケナー。いずれも著名な学者だ。しかしながら、第二次大戦後にアメリカの学者たちがアイルランドを訪問するのは、この低迷した都市を活気づける役に立っていた。「ジェイムズ・ジョイス」という名前がアメリカの学者たちを多数、アイルランドに惹きつけたのである。カヴァナは「ジェイムズ・ジョイス」をアイルランド人作家として占有しようとしたかったのだろう。が、狭量な民族主義者の発言とも響く。いずれにせよ、1954年のブルームズデイを皮切りに、1962年にはサンディコーヴのマーテロ塔がジョイス・ミュージアムとして開館した。

折しもアイルランドでは、1959年から1966年の間、ショーン・レマスが首相になり、経済政策の転換を図った。カイバードはこう回想している。「1960年代は比較的豊かな時代であった。多国籍企業がアイルランドに投資した。子どもたちも無料の中等教育を受ける恩典を味わった。ヨーロッパのリゾート地での休暇も可能になった。長らく続いたアイルランド人の知的生活の内向化も終わりを告げた」(Kiberd 479)。同じことは多くの批評家が指摘するところであり、1959年はアイルランドにとり「驚異の年」ともなった。実際、1961年にECに加盟を表明し、1973年に申請が認められている。こうしてアイルランドにおける都市化、工業化、ヨーロッパ化が進行した。この国内事情の変貌とモダニストとしてのジョイス受容は、密接につながっている。かくしてその生誕百年祭を記念して、1982年、ジョイスもアイルランド人作家として承認された。

ひるがえって、『若い芸術家の肖像』において、主人公が大陸へと離脱するのは、自国の閉塞感に別れを告げ、大陸ののびやかな世界を渴望したからだろう。また『ユリシーズ』の主人公がユダヤ人の血

を受け継いでいるのも、その後の国際性に関わることである。さらに『フィネガンズ・ウェイク』におけるテレビ放送も時代の流れに則している。モダニズムは時代の価値観の転覆を図りながら、その一方でその後の西洋文明が発展するためのきっかけとなっていたはずだ。アイルランドのジョイス受容は、換言するなら、ジョイスの文学的方位に倣い、自らがヨーロッパ化したということでもある。このような流れと軌を一にして、ダブリンという都市とジョイスの作品との間の、あるいは現実と虚構との間の境界が少しずつ崩れることになる。ダブリンという現実がジョイスのテキストによって改作されている、そんな感じを抱くことにもなる。あるいはジョイスのテキストがダブリンを解説するための手がかりに思えることもある。ジョイスの受容はレマスの経済政策の恩典を受けたことで、アイルランドがジョイス化したとも思われる。ジョイスのテキストは、その舞台となっている1900年前後の過去の光景を喚起すると同時に、ポストモダンと呼ばれる現代を架橋することにもなったのだ。

ナボコフの『ユリシーズ』講義

このようなアイルランド事情と関わりなく、アメリカではジョイス研究の成果が次々と登場した。ウラジーミル・ナボコフも研究の発展に貢献した一人である。彼はコーネル大学で教えていた1950年代、英米を中心としたヨーロッパ文学についての講義をおこなっている。これはアメリカのジョイス受容を知るうえでも貴重である。ジョイスについての博士論文が誕生するか否かのころのこと、学生に文学への興味を掻き立てようとしたのか、『ユリシーズ』の講義にはナボコフの工夫が窺い知れる。テキストへの書き込み、あるいは講義用の詳細なノートも残している。これらは貴重である。エドモンド・ウィルソンやハリー・レヴィンを継承する、ジョイスへの入門書としても参考となろう。ナボコフの『文学講義』における『ユリシーズ』論について、大よそのところをまとめておきたい⁽²⁾。

実のところ、ナボコフは『ユリシーズ』の全三部にわたり、挿話ごとに、時刻、場所、登場人物、物語の展開、文体などについて、学生の参考となる解説を作成したらしい。さすがに大作家らしく、聴き手に飽きないように、『ユリシーズ』の物語を面白く伝えてくれている。難しい挿話は簡単に、易しい挿話は興味深く論じている。皮肉ではない。『ユリシーズ』を読むことを放棄してしまう学生が多いことから、教師としての配慮によるものだろう。誤読や偏見と思われる怪しいところも無きにしもあらずだが、なるほどと頷くような鋭い指摘もいまだ多い。

第一部は第一挿話「テレマコス」から第三挿話「プロテウス」までの三つの挿話での構成で、ナボコフはスティーヴンの意識を巧みに紹介している。とりわけ第一挿話については、導入部として細かく説明が付されている。類似した夢から人物を接続するという、共時的な手法も読み取っている。第二挿話「ネストル」は学校にまつわる挿話で、スティーヴンの意識やディージー校長の性格などが巧みに語られている。第三挿話はサンディマウントの海岸を舞台とし、三本マストの船から早くも第十六挿話へと物語を接続してみせる。アイルランド文学、民族主義、歴史、あるいは認識論といった『ユリシーズ』の背景へと逸れることはない。ナボコフがこだわるのはあくまで物語の仕組みだ。

第二部は第四挿話「カリュプソ」から第十五挿話「キルケ」までの十二の挿話で構成されている。と

りわけ第四挿話から第六挿話までは、第一挿話から第三挿話までと同時刻のことで、スティーヴンの意識と対比させ、ブルームを中心とする物語が展開している。そのため、第四挿話については、ブルームの家の朝の光景をめぐる実に細かい説明がなされ、家の構造についての手書きの地図も用意されている。第五挿話「食運人たち」では、市内を歩くブルームをめぐり、その一日を念頭に、アスコット競馬の情報が詳細に述べられている。第六挿話「ハデス」はブルームが墓場を訪れる挿話だ。ユダヤ人としてのブルームのことに言及した後、墓場に登場する「雨外套の男」がジョイスであると自信満々に論じている。論の飛躍もあるが、それなりに興味を惹く。

第七挿話「アイオロス」からブルームとスティーヴンの交叉が始まる。ナボコフはこの挿話について、走り読みしておけば済むとそっけない寸表を加え、急いで後続の挿話へと転じる。第八挿話「ライストリュゴネス族」では新聞社から国立図書館までのブルームの足取りがたどられているが、盲目の青年の足取りの地図を描くなど、意表をついた細部の読み込みを試みる。第九挿話「スキュレとカリュブデイス」は、国立図書館でのスティーヴンのシェイクスピアをめぐる挿話だ。ナボコフはスティーヴンのシェイクスピア論の意義よりも、彼とブルームが前夜に同じ夢を見たことに着目し、人物相互の接続へ向けて論を広げている。

第十挿話「さまよう岩々」は十九のセクションに分かれ、神父と総督の足取りを中心に、市民の生態が描かれている。驚くべきことに、ナボコフはマイナーな人物の「意識の流れ」にも注目している。この挿話以降、文体の実験が目覚ましい。第十一挿話「セイレン」は音楽的な挿話であるが、ナボコフはこう嫌悪を募らせる。「ジョイスはその天才にもかかわらず、胸の悪くなるようなことに倒錯的な偏執を持っている」(Nabokov 342)。なお、セイレンとしてのドロレス（ロリータ）を無視しているのは遺憾である。第十二挿話「キュクロプス」はバーニー・キアナンの酒場が舞台で、アスコット競馬と反ユダヤ主義を指摘するのみの短い解説で、単眼的な政治論に関心を向けてはいない。第十三挿話「ナウシカア」では、ブルームが若い娘を窃視し、自慰にふける。娘の意識を構築している女性週刊誌をめぐり、ナボコフはその内容を縷々語る。彼の興味どころである。

第十四挿話「太陽神の牛」は国立産婦人科病院が舞台で、古英語から現代英語にいたるまで文体が変転する挿話だ。解説は短いが、スラングで語られる現代英語の場面について、ナボコフは、「この作者の最後の小説となる次作、すなわち文学史上最大の失敗作の一つ、『フィネガンズ・ウェイク』の……模倣やだじゃれの文体」(Nabokov 349)を予知させる、と手厳しい評釈を下している。第十五挿話「キルケ」は娼婦街でのスティーヴンとブルームの幻覚を描いた挿話であるが、ナボコフは、「精神分析的な解釈……わたしはそんな解釈をまったく拒否する……なんでも暗い舞台裏のせいにするフロイト流派には与しない者だからだ」(Nabokov 350)、と本挿話解説の冒頭で宣言している。その毅然とした言葉には驚くものの、厳密な読みを基に、幻覚は作者自身の幻覚であると断言する。さすがに巧みな読み手であると驚かされる。

第十六挿話「エウマイオス」より第三部の三つの挿話が始まる。この挿話では馭者溜りでのスティーヴンとブルームの交流が描かれているが、挿話の主題がモリーにあると指摘し、読者の意表をついてい

る。第十七挿話「イタケ」はブルーム宅の台所、庭、および寝室が舞台だ。そしてこの疑似科学的な文体による事実の列挙としての挿話をめぐり、スティーヴンとブルームの相違、スティーヴンとブルーム一家の今後などを分析している。また第十八挿話「ペネロペイア」はモリーの「毒々しい、俗悪な、熱に浮かされたような心、ややヒステリックな女の心」を綴っていると指摘している。そんな人物はどうみても「正常な人間」(Nabokov 362)ではないと酷評するが、それでも詳細な分析が試みられ、結びの言葉も見事である。

ナボコフは『ユリシーズ』の取るに足りない冒険に『オデュッセイア』のパロディを見ることはやめるべきだと言う。彼は象徴的な読みを否定し、現実的な細部の読みの意義を公言してはばからない。そんなナボコフにとり、ダブリンの地図は物語を読み解くのに不可欠なものであった。彼の指摘するところによると、教師たるものは『ユリシーズ』を読むにあたり、ダブリンの地図を用意し、ブルームとスティーヴンが互いに交叉する街での足跡をたどってみるべきだという。これは細部を愛でる作家として当然であるかもしれない。アイルランドでジョイス受容に賛否両論が交わされている時代にあって、その文学に果敢に挑戦する姿勢は驚きである。そしてアメリカではナボコフに続いて、リチャード・エルマンとヒュー・ケナーという優れた学者が誕生している。これもアイルランドの学者たちには無視しえぬ動向であったろう。この二人の偉業については前回でも述べたが、少しばかり補足の説明をしておきたい。

エルマンとケナーの時代

アイルランドのジョイス受容に刺激を与えたのはアメリカである。アメリカのジョイス受容は早くから開始されていた。その熱意に興ざめするアイルランド人も少なからずいたが、アイルランド事情に関わりなく、アメリカではジョイスが自国の人間でもあるかのように受容されていたのである。そのようなアメリカの研究のうちでも、世界的な影響を与えたのがリチャード・エルマンで、1959年刊行の『ジェイムズ・ジョイス伝』は「決定版」という折り紙が付けられている。エルマンは1948年にW. B. イェイツ論『イェイツー人と仮面』を仕上げた後、ジョイスの伝記に取り組んだ。ジョイスが没してそれほど年月も立っておらず、収集するべきデータもそろっていた。「エルマン」と言えば『ジェイムズ・ジョイス伝』ということになった。パトリック・パリンダーによれば、「ジョイスについての二次的な文学のうちでも、一冊の書物は不可欠で必須の読み物になっている。それはリチャード・エルマンの『ジェイムズ・ジョイス伝』である」(Parrinder 255)。

伝記は文学ではないと言われることもある。テキストと作者との関わりを実証的に描くのであれば、そうであろう。そこには対象への批評が欠如している。精々のところ批評的な伝記と呼べるだけである。その一方で伝記はテキストの知識がなくとも、作者についての知識を与えることができる。エルマンの伝記が多く読者を獲得したのも、難解な作者に接近することを可能にしてくれたからだ。それに加え、エルマンの書き方は年代順に巧みに情報を提示してくれている。ジョイスの伝記としては、ジョイスの意に沿ったハーバート・ゴーマンの『ジェイムズ・ジョイス』(1939)の他、ケヴィン・サリヴァンの

『イエズス会士のなかのジョイス』（1958）、ピーター・コステロの『ジェイムズ・ジョイス—成長期』（1992）などたくさんあるが、しかし多くの情報が今や過去のものとなっている。ジョイスを知る多くの人が亡くなり、ダブリンやパリという都市も変貌した。エルマンの伝記が「決定版」と評価されるゆえんである。

にもかかわらず、エルマンの『ジェイムズ・ジョイス伝』に瑕疵がないわけではない。空白、混乱、省略などもある。ジョイスを知る人々から得た情報も、秘匿にするという条件付きで与えられたものが多かったであろう。また補足の必要な情報もあるであろう。そして間違いもあったはずだ。エルマンは1982年に最新版を刊行したが、1959年に代わる情報は少ない。そのように読むならば、エルマンが誤報を喧伝している部分もあるし、「決定版」という評価も信憑性に欠けるであろう。エルマンの力点は芸術家としてのジョイスである。クロンゴーズ校での生活にしても、弟のスタニスロースの意見とはまったく異なり、「不幸で病弱な」生徒であったとしている（Ellmann 27）。ジョイスを描くのに際して、人生が芸術と不可分であったとの前提に拠って立っていたらしい。彼はこう記している。

芸術家の人生は、とくにジョイスの人生の場合、他の人々とは異なっていた。彼の人生の出来事はさししまった用事を前にしていたとしても、芸術の素材になっていたのだ……彼は自分を形成した経験を再形成する……そして経験を再形成するというプロセスは彼の人生の一部に、すなわち起きたり寝たりするような、そんな繰り返しのプロセスになっていたのである（Ellmann 3）。

こうしたエルマンのジョイス観からすれば、そこに政治が入り込む余地はない。にもかかわらず、エルマンの教え子であったドミニック・マンガニエロは、こと政治に関しては師と袂を分かち、『ジョイスの政治』（1980）を刊行した。エルマンが政治に無関心であったわけではないだろうが、その後のジョイス批評はジョイスと政治が切り離せないことを論じている。たとえば、ニュー・ヒストリシズムの影響を受けたジェイムズ・フェアホールは、『ジョイスと歴史の問題』（1993）で政治を前景化した。さらにポストコロニアリズムの時代に沿うかのように、ヴィンセント・J. チェンが『ジョイス、人種、帝国』（1995）を刊行した。こうした流れは、トリエステでのアイルランドをめぐるジョイスの数多くのエッセイからも明らかなはずであったが、芸術家としてのエルマンの『ジェイムズ・ジョイス伝』があまりにも「決定版」でありすぎたため、異論の余地がなかったのだろう。

その一方、エルマンと同時代の批評家ヒュー・ケナーのジョイスの文学についての読みは、まったく対照的であった。両者を単純化して区別するのはそれほど難しくない。ハリー・レヴィンの学風が神話と事実、本物と皮肉、楽観主義と悲観主義の融合であったとすれば、エルマンとケナーはそれぞれ前者と後者に分離されることになる。ナボコフの文学講義はケナーに近いものであったが、彼はあくまで文学教師としての位置にとどまっていた。それと対照的にケナーはエルマンと同じく研究者として、ジョイスの作品全般の解説に全力を注ぐことになった。

エルマンの『ジェイムズ・ジョイス伝』の前年に『ダブリンのジョイス』を刊行して以来、ケナーは

広い視野で次々にジョイスについての研究書を著した。『ダブリンの市民』所収の「イーヴリン」については、当時の船の出港予定なども調べあげ、フランクとイーヴリンの駆け落ちに警鐘を鳴らしている。この物語はジョイスがノーラと大陸へと離脱する直前に書かれたこともあり、フランクとのブエノス・アイレスでの生活にまつわるイーヴリンの不安に麻痺を読み取ることも多い。しかしながら、現地で「白人奴隷」として売られる可能性をめぐり、キャサリン・マリンがケナーの論考を突き詰めている(Mullin 172-200)。物語を詳細に読み、その背景となる皮肉を探るのがケナーである。

皮肉ということからすれば、『若い芸術家の肖像』の主人公スティーヴン・ディーダラスに対する、ケナーの姿勢についても言える。エルマンがスティーヴンにジョイスの若き姿を見て取ったのとは逆に、スティーヴンとジョイスの間の距離に固執したのがケナーである。『ユリシーズ』の冒頭の三つの挿話に登場するスティーヴンを読むなら、ダイダロスであるよりはイカロスとしてのスティーヴンに気づくが、ケナーは『若い芸術家の肖像』の文体に早くもその可能性を認めている。そしてスティーヴンはダブリンから切り離せない存在として、作者ジョイスとは明らかに異なっていると説く。中心人物はいわば作者の伝記の一部であるという和やかな姿勢はない。

そのような緻密なケナーの読みからすれば、『ユリシーズ』の第十四挿話と第十五挿話の間で、スティーヴンとマリガンとの騒乱を示唆することも可能であったろう。そしてダブリンという都市に対しても、「荒地」のような光景を指摘している。ケナーはカトリックであり、カトリックとしての視点からモダニズムの機械文明への批難を展開している。その意味では、ケヴィン・サリヴァン、ロバート・ボイル、ウィリアム・T. ヌーンといったカトリックの研究者と変わらない。スティーヴンの背教はジョイスの他我にすぎないが、しかしケナーの冷徹な眼ざしはさらにダブリンの宗教的危機を探るものでもあった。エルマンと異なり、ジョイスの描くダブリンの腐敗した物質主義への攻撃は手厳しい。おそらくケナーの『ダブリンのジョイス』の背景にあるのは、広告などに操られる現代人への告発である。ちなみに、ケナーはメディア論で著名な、同じくカトリック教徒のマーシャル・マクルーハンの弟子である。したがって、ケナーは手探りしながら、人物が言葉に動かされていることを明らかにしている⁽³⁾。彼のジョイス論の底を流れているのは、宗教、技術、テキスト性である。

理論の到来

エルマンとケナーのジョイス研究はそれぞれ異なっているが、それぞれが果たした功績の一つはイギリスの批評、とりわけF. R. リーヴィスのジョイス批判を粉砕し、ジョイスの文学を英文学のカノンとしたことだろう。ここで意味する「カノン」とはモダニズムの国際性と切り離せない。このことはリーヴィスの夢想する「イギリス文学」が、「地域文学」にすぎないことを示すものである。英語はイギリス、アイルランド、アメリカという三つの地域の言語であるだけでなく、国際性という広い尺度で測定されるべきものだろう。そのような事情は語るまでもなく、すでにユージン・ジョーラスが強調していたことである。

こうした世界の動きに理論が持ち込まれるのはほどなくのことである。エルマンやケナーに理論がな

かったわけではないし、彼らに続きほぼ軌を一にしてフランスの思想を駆使した、マーゴット・ノリスの『「フィネガンズ・ウェイク」の脱中心化の宇宙』（1974）のような研究書も刊行されていた。クロード・レヴィ＝ストロース、ジャック・デリダ、ジャック・ラカンといったフランスの思想家が巧みに援用されている。すでに取り挙げたイギリスのコーリン・マッケイブの論考と比較しても遜色はない。ジョイスが理論を生み、理論がジョイスを創造したとも思われる。

こうした文学理論とアイルランドの文学的伝統の変容は密なものと思われる。アイルランドは地誌的にもジョイス研究に最適であるし、ジョイスというシニフィアンはアイルランドを定義する格好の素材である。にもかかわらず、モダニストとしてのジョイスの位置に、アイルランドが折り合いが付けられているとも思われない。南北分離の状況に進展が見られたとはいえ、多文化社会の到来にとまどいを抱いているのかもしれない。

科学研究課題番号：26370335

注

- （1） デ・ヴァレラは1943年のクリスマスのラジオ放送で、アイルランドについてこう述べていた。“a land whose countryside would be bright with cosy homesteads, whose fields and villages would be joyous with the sounds of industry, with the romping of sturdy children, the contests of athletic youth and the laughter of comely maidens, whose firesides would be forums for the wisdom of serene old age...” (Lee 334).
- （2） 以下のナボコフ論は拙稿『『ユリシーズ』をめぐるナボコフの文学講義』を参照した。
- （3） ケナーは人物と言葉との関係について、以下のような興味ある指摘をしている。“they can speak only in quotations, and despite their consciousness of effort, their thought runs in grooves.... Their circumbient language doesn't serve the citizen's thought but direct it. He inherits locutions that they were once alive, and shapes his mental processes accordingly ... It is in language that the dead city is perceived; and it is language that maintains the citizens in deadness ... [the Dubliner] speaks the language that is given him, and entertains the corresponding ideas ... he acts on the promptings of *idées reçues* and talks in words that have for too long been respoken.” (Kenner 8-10)

引用・参考文献

- Boyle, Robert. *James Joyce's Pauline Vision: A Catholic Exposition*. Carbondale: Southern Illinois UP, 1978.
- Carlson, Julia. *Banned in Ireland: Censorship and the Irish Writer*. Athens: Georgia UP, 1990.
- Cheng, Vincent J. *Joyce, Race, and Empire*. Cambridge: Cambridge UP, 1995.
- Costello, Peter. *James Joyce: The Years of Growth, 1882-1915*. London: Macmillan, 1992.
- Cronin, Anthony. *Dead as Doornails: Bohemian Dublin in the Fifties and Sixties*. Oxford: Oxford UP, 1976.
- Deming, Robert, ed. *James Joyce: The Critical Heritage*. London: Routledge and Kegan Paul, 1970.
- Ellmann, Richard. *James Joyce*. Oxford: Oxford UP, 1982.
- Fairhall, James. *James Joyce and the Question of History*. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- Foster, R. F. *Modern Ireland 1600-1992*. London: Allen Lane, 1988.
- Givens, Seon, ed. *James Joyce: Two Decades of Criticism*. New York: Vanguard P, 1948.

- Graham, B. J. "Heritage Conservation and Revisionist Nationalism in Ireland." In *Building a New Heritage*. Ed. G. J. Ashwood and P. J. Larkham. London: Routledge, 1994.
- Herr, Chryle. *Joyce's Anatomy of Culture*. Chicago: Illinois UP, 1986.
- Joyce, James. *Selected Letters*. Ed. Richard Ellman. London: Faber, 1975.
- Kavanagh, Patrick. "Who Killed James Joyce?" In *A Bush in the Tunnel*. Ed. John Ryan. Brighton: Clifton, 1970.
- Kenner, Hugh. *Dublin's Joyce*. Indiana: Indiana UP, 1956.
- Keogh, Dermot. *Twentieth-Century Ireland: Nation and State*. Dublin: Gill and Macmillan, 1994.
- Kiberd, Declan. *Inventing Ireland: The Literature of the Modern Nations*. London: Vintage, 1995.
- Lee, J. J. *Ireland: Politics and Society 1912-1985*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- Manganiello, Dominic. *Joyce and Politics*. London: Routledge and Kegan Paul, 1980.
- Mercier, Vivian. "Dublin Under the Joyces." In *James Joyce: Two Decades of Criticism*. Ed. Seon Givens. New York: Vanguard P, 1948.
- Mullin, Katherine. "Don't cry for me, Argentina: 'Evelin' and the seduction of emigration propaganda." In *Semicolonial Joyce*. Ed. Dereck Attridge and Marjorie Howes. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Nabokov, Vladimir. *Lectures on literature*. Ed. Fredson Bowers. New York: Harvest, 1980.
- Noon, William T. *Joyce and Aquinas*. New Haven: Yale UP, 1957.
- Norris, Margot. *The Decentered Universe of "Finnegans Wake"*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1974.
- O'Connor, Joseph. *The Secret World of the Irish Male*. London: Minerva, 1995.
- Parrinder, Patrick. *James Joyce*. Cambridge: Cambridge UP, 1894.
- Sullivan, Kevin. *Joyce among the Jesuits*. New York: Columbia UP, 1958.
- 結城英雄 「『ユリシーズ』をめぐるナボコフの文学講義」 *Krug* 6 (2013) 22-27.